



高校

本校の生徒2名が「文部科学大臣表彰」を受賞

8月7日、文部科学省において「令和5年度国際科学技術コンテスト優秀者等表彰」が執り行われ、箕浦祐璃さん(3梅)と光吉音葉さん(3梅)が「文部科学大臣表彰」(※)を受けました。

今回の受賞対象は、アメリカで開催された学生の科学のオリンピック「Regeneron ISEF(国際学生科学技術フェア)2023」(以下、ISEF)に参加した生徒等になります。このコンテストで特に優秀な成績をおさめた者に対しては「文部科学大臣表彰」、健闘した者に対しては「文部科学大臣特別賞」が授与されました。

本校の生徒2名は、ISEFにおいて、紅と墨を用いた江戸時代の伝統的な化粧法の再現・解析を行い、材料科学部門の「優秀賞4等」受賞となり、「文部科学大臣表彰」

を受賞しました。

表彰後に行われた築 和生文部科学副大臣との懇談においても、生徒たちは自らが得た経験が今後の教育に活きるよう積極的に発言し、活発な意見交換が行われました。

箕浦さん、光吉さんからのコメントを左下に掲載します。

※「文部科学大臣表彰」は「文部科学大臣賞」とは異なるもので、文部科学大臣(今回は副大臣)から直接の表彰を受けるものになります。

PHOTO GALLERY

フォトギャラリー



高校

演劇部 2023かごしま総文 「放送部門」朗読に出場

7月29日から鹿児島県で「第47回全国高等学校総合文化祭鹿児島大会(2023かごしま総文)」が開催され、8月3日に行われた「放送部門」の朗読分野に、本校の梅野由葉さん(3萩)が東京都代表として出場しました。梅野さんは昨年11月に出場した「第45回東京都高等学校文化祭放送部門 朗読部門」で「第2位」となったことで本大会への推薦を勝ち取り、日々演劇部の練習の後に一人朗読の練習を重ねてきました。当日は、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の朗読を行い、入賞こそ逃したもの、会心のパフォーマンスを見せてくれました。



梅野さん

大学

国際連携教育プログラム 開講式を実施 軽井沢研修旅行も4年ぶりに実現

8月25日、2023年度の「国際連携教育プログラム」開講式が本郷キャンパスB'sダイニングで実施されました。昨年度から留学生の受け入れが再開されていますが、今年はアメリカ(セント・ベネディクト/セント・ジョンズ大学【CSB/SJU】)から12名、マレーシアから2名、カザフスタンから2名、ウズベキスタンから2名、ブルガリアから2名、トルコから1名、合計21名の交換留学生が本学の「国際連携教育プログラム」で学びます。

当日は、島田昌和学院長・理事長による歓迎の挨拶から始まり、CSB/SJU引率者のElizabeth Johnson先生と留学生がそれぞれ自己紹介をしました。そして、島田燁子名誉学院長の紹介の後、記念写真撮影が行われました。

開講式後に実施された歓迎会では、国際交流部の学生によるウェルカムスピーチも行われ、楽しい歓談の時間となりました。

また、9月3日~4日の2日間、本学の軽井沢セミナーハウスを拠点とした研修旅行が4年ぶりに開催され、交換留学生21名と本学学生18名が参加しました。初日の浅間縄文ミュージアムを訪れた際は、貴重な土器の見学や勾玉作りを体験しました。さらに、白糸の滝や鬼押出し園の見学、軽井沢タリアセンでのバーベキューランチなどを通して、留学生同士や在学生との絶好のコミュニケーションの機会となりました。



開講式での留学生と関係者一同



軽井沢研修旅行にて



勾玉作りを体験する留学生たち

GREEN SPIRITS

文京の伝統と今

保健医療技術学部
臨床検査学科長・准教授
眞野容子

文京と共に人生を歩んでいる私が臨床検査学科長に拝命されましたのは令和5年4月でございます。思い起せば文京学院との歩みは47年にもなります。と申しますのは、実母の勧めで当時「文京学園女子中学・高等学校」の名称であった学校の生徒として、中高一貫教育を受けさせていただいたからです。創立者、依史子先生の「朝のことば」を拝聴し、誠実・勤勉・仁愛の精神を学び

ました。専門学校時代には二代目和幸先生が実習室をご訪問され、実習見学の際、私に質問してくださいったうれしい出来事が、今もなお想い出されます。その後、三井記念病院で5年間勤務後、ご縁があり母校で専任講師となりました。早いもので、専門学校専任講師から数えると30周年の節目を迎えさせていただきます。節目の本年、学科長となつたことは運命であったのかと思わざるを得ません。

大学全入時代を迎えて、更に続く少子化、これらの要因による学生獲得競争は激化する一方だと思われます。今を乗り越えるべく、文京学院ならではの改革を、本学科の教員と共に発足いたしました。1~3年生までを1クラスとするアドバイザー制度、少人数制によるグループ学習、学生個人に合わせた寺子屋学習を立ち上げ、学生全員が順調に勉強することができ、進級に繋がることを目

的に実施しております。学生が専門的知識や技術を学び、卒業時にはその力を存分に発揮できるようなることを目指します。そして、これらの改革が軌道に乗るために教職員の和が求められると思います。

学科長として、国家試験合格率・卒業(進級)率・学生募集等々、目標は多様にある中で、1年目は誠実・勤勉・仁愛をモットーに勤務したいと思っております。そして、教職員や学生との和を大切に育み、環境の良い職場を目指すことが理想です。最終的には、将来の日本医療界に貢献できる人材を育成したいと考えております。

文京愛を常に心に刻み、創立者の建学の精神を受け継ぎ、伝承し、かつ斬新な改革を開拓していくことが私の使命であると思っております。ご指導いただきご多々あること存じますが、皆様、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の5類移行や入国制限の緩和などが進んだ影響もあり、本学でも留学生の受け入れや提携校との交流、海外での語学研修・インターンシップなどが順次再開されています。

大学 カブリヨ大学×児童発達学科 ECE研修プログラムが3年ぶりに再開

6月24日～7月10日、「カブリヨ大学ECE(※)研修プログラム」が3年ぶりに実施されました。本プログラムは、児童発達学科の海外短期フィールドワークの提携校、カリフォルニア州立カブリヨ大学の幼稚教育学科との双方向プログラムとして14年前に始まつたもので、今回で事実上11回目の受け入れとなります。本学の学生がカブリヨ大学併設のChildren's Centerや近隣の保育所・小学校で実習をさせてもらう一方、カブリヨ大学の幼稚教育専攻の学生にも日本で同様の体験をもらうことで、より一層お互いの深い学びにつながることを目的とし実施しています。

今年は2名の留学生を受け入れ、ふじみ野幼稚園での5日間の実習、近隣の保育所・幼稚園見学、児童発達学科の授業参加と学生との交流など、2週間にわたりての盛りだくさんの研修内容でした。学生たちにとっても、同じ目的をもっている留学生たちとのインフォーマルなおしゃべりが楽しい体験となったようです。幼稚園では、英語が分からなくても、子どもたちが自然と寄って来て一緒に遊んでいる姿が見られ、子どもが持つ不思議な力を感じました。最後に留学生たちからまとめの発表があり、幼稚園の先生や児童発達学科の学生・教員も参加して、日米の保育の違いなどについて有意義な討論ができました。その後はホストファミリーが全員集まってくれて、送別会が開かれました。本学からは修了証が渡され、留学生たちからは関係者に感謝のカードやお花が贈られ、和やかなパーティーとなりました。※ECE=Early Childhood Education(幼児教育)



高校 「2023年度夏季語学研修」4年ぶりに実施

7月23日～8月7日、オーストラリアのブリスベンでの語学研修が実施されました。4年ぶりの夏季語学研修の実施ということもあり、定員を超える応募の中から高校2年生17名、1年生13名の計30名が参加しました。訪問先はブリスベン郊外の閑静な住宅街にあるClayfield Collegeという私立学校で、30名全員がボーディングハウス(寮)にお世話になりました。

「Koala Sanctuary」や「Sea World」などオーストラリアならではのアクティビティも魅力的でしたが、なんと言つても学校で過ごす日々の生活が多く学びをもらってくれました。日中は学校でバディと一緒に授業を受け、学校が終わると道路を挟んで向かいにあるボーディングハウスでの生活を送る、という日々で、今回のプログラムは語学研修というよりはブチ留学の方が相応しいかもしれません。日本で受けたことのない教科を英語で受けることの難しさは並大抵ではありませんでしたが、バディたちが優しくサポートしてくれたおかげで頑張り通すことができました。

7時起床、10時消灯、そしてモーニングティーとアフタヌンティーを含む1日5回の食事、とボーディングハウスで暮らすボーダーたちは規則正しい生活を送っています。そして、様々な文化背景の寮生たちが安全で楽しく暮らすために、寮には洗濯やシャワーなど生活に関するたくさんのルールとルーティーンがあります。初日こそ戸惑いがありましたが、3日もすればすっかり慣れて、本物のオーストラリアの高校生の生活を楽しみました。寮の先生方や友だち、学校のバディ、多くの方に支えられて、たった2週間の研修が一生の思い出になりました。

大学 子どもたちの“まなび”と“遊び”体験イベント オープンキャンパス同日に開催

8月6日、ふじみ野キャンパスにて、「まなびと遊びのキャンバス～大学であそんでみよう！～」が開催されました。企画は、ふじみ野キャンパスの地域にお住まいの子ども（幼稚～小学校2年程度）とその保護者にお越し下さいて、学生と教員が一緒にまなびと遊びの活動を楽しむイベントです。そして、児童発達学科の学生には大学での学習を実践する付加的専門性の活動として、地域の皆様には本学及びふじみ野キャンパスを理解していただく社会連携・社会貢献の一環として、さらに同時に開催のオープンキャンパスに来場する高校生には、子どもと関わる経験やその現場を体験する機会もあります。

当日は、学科学生26名と教員が、受付の運営やまなびと遊びのブース「シャボン玉であそぼう」「絵の具であそぼう」「英語であそぼう」「カブラであそぼう」を担当し、来場者計25組（子ども38名・大人38名）が参加しました。子どもたちは家族と一緒に、各ブースに参加して学生たちと一緒に遊びました。さらに、オープンキャンパスに来た高校生も加わり、賑やかで明るく、楽しいイベントになりました。参加した子どもたちから、「大学生のお姉さん・お兄さんと遊べて楽しかった」「また参加したい」という声をいただきました。学部生からは、楽しかった実感と共に、実際の子どもの反応や関わらかいくつもの学びを得たなどの振り返りがありました。

ふじみ野キャンパスで継承してきた地域実践型の教育・研究活動が、関わる人が共に育ち合う機会となり、今後も活動を継続していくことが大切と再認識しました。

大学 海外インターンシップを実施 ガルーダ・インドネシア航空CAの実務を体験

8月20日～30日、インドネシアのジャカルタにあるガルーダ・インドネシア航空訓練センター(GITC)にてキャビンアテンダント(CA)の研修が実施され、外国語学部の学生6名が参加しました。本研修は新型コロナウイルス感染症拡大の影響から4年ぶりの開催となり、本学を含む4大学より航空業界を目指す学生23名が集まり、実施されました。

外国語学部の高橋修一郎教授(研修企画運営)と参加学生2名のコメントをご紹介します。

高橋 教授 の コメント

ガルーダ・インドネシア航空にて、CA研修を4年ぶりに再開しました。本研修は現役CAが訓練しているトレーニングセンター(GITC)で教官から指導を受ける、夢を形にする取り組みになります。保安要員としての緊急対処、接客部門の機内サービス、インドネシア文化舞踊等、すべて英語で展開されます。研修の目的は、「①教室で学んだ知識を現場での訓練経験により知恵に変換する」「②リアル体験によりキャリア目標を明確にし、モチベーションを高めること」の2点です。結果として、参加学生の感想からも経験が価値という財産になったようです。帰国直後、参加学生の表情は達成感に満ち溢れていきました。大切なのは研修後です。目標の達成に向け頑張りましょう。



参 加 学 生 の コメント



木下愛望
外国語学部3年



田村心
外国語学部3年

ガルーダ・インドネシア研修は、現地の方に温かく受け入れてもらい、CAのことだけでなく、文化も学ぶことができました。また4大学合同開催ということで、初めは不安もありましたが、お互いに意識を高く持ち、高め合うことができました。主に現地ではCAの仕事内容や心得を学び、実践的な研修も行いました。それらを通じ、人と関わる仕事がどのようなものなのか、また世界を舞台に働くには何が必要なのかを考える機会となり、将来のことをより明確にできるチャンスになりました。今回の研修を通して、日本とは異なる文化の中で英語を使って仕事をすることに憧れを持ち、将来は海外で仕事をしたいと強く思いました。今回の経験をぜひ将来に役立てたいです。

PHOTO GALLERY 海外インターンシップ フォトギャラリー



大学 外国語学部 海外フィールドワークを実施

8月～9月にかけて、外国語学部の学生25名が、カナダ/韓国に分かれ、卒業研究の一環として、現地調査を目的としたフィールドワークに参加しました。外国語学部の海外フィールドワークは、昨年度から現地への渡航を再開し、2年連続での実施となりました。

今後も「現地でしかできない体験」を通して、異文化の相互理解を深め、国際社会で活躍する力、また将来に向けての人的ネットワークの形成にもつなげていきます。

英語教育特講II-a

日 程：2023年8月18日～9月4日
場 所：カナダ ノバスコシア州 ハリファックス
人 数：6名【担当教員：山内ダーリーン准教授】

国際文化フィールドワーク実践II／フィールドワーク

日 程：2023年8月27日～9月5日
場 所：韓国 ソウル特別市
人 数：10名【担当教員：新井保裕准教授】

国際ビジネスフィールドワーク

日 程：2023年8月27日～9月5日
場 所：韓国 ソウル特別市
人 数：9名【担当教員：金彦叔教部長・教授】

参 加 学 生 の コメント



志賀朋葉(4年生)

私は今回のフィールドワークで、初めて海外に行きました。フィールドワーク活動での「フードバンク」では、地元の方々の全員が優しく私たちに教えてくださいました。そして、フードバンクに来た方の必要としている物や食材を準備し、それを手渡しました。その後に、もっと人のためにできることを探してみようと思うことができました。また、ハリファックスの港でのフィールドワークで、タイタニック号事件を知ることができたなど、カナダの文化や歴史を学ぶことができました。ホームステイでは、食文化やライフスタイルの違いに最初は戸惑うこともありましたが、安心できる環境の中で過ごすことができ、フィールドワークが終わる頃には、第2の家として認識していました。ホストマザーにとても感謝しています。私はコロナ禍に入学したため、大学時代に海外経験はできないのではないかと思っていたが、とても濃い経験をることができた2週間でした。



参 加 学 生 の コメント



篠原咲良(3年生)

10日間の韓国でのフィールドワークを通して、多くの現地の大学の学生たちと交流をし、日韓の文化や言語使用などについて話すことができ、学びを深めることができました。また、交流会後も、一緒にご飯を食べに行ったり、連絡を取り合ったりする友人もできました。文化体験では、韓国の制服を着てロッテワールドに行ったり、韓服を着て景福宮を訪れたり、韓国の伝統家屋を利用しているカフェを調査したりもしました。これらの貴重な経験を今後の自分の研究に活かしていきたいです。



参 加 学 生 の コメント



板垣舞雪(3年生)

今回のフィールドワークで最も印象的だったのは日韓交流会です。学校同士の交流はフィールドワークだからこそできるものなので、日本に興味のある学生と日本語・韓国語で会話をしたり、現地の学生とキャンパスツアーをするなど、とても貴重な時間でした。交流会の後には夕食や遊びに誘ってくれて、現地の学生の情の深さを感じ、心が温かくなりました。この縁を大切にし、今度文京学院大学に来る際には私たちが盛大に迎えてあげたいと思いました。



人間学部では、ふじみ野市と協働し、官学連携の講座やプロジェクトでの取り組みが実施されました。

大学 ふじみ野市×人間学部生 サステナブルな生ごみ処理容器「ベランダ de キエ一口」利用促進動画を制作

「社会的課題を心理学とアプリで解決」をテーマとした研究を行う、人間学部心理学科の永久ひさ子教授と心理学科4年生10名により、昨年からふじみ野市との官学連携事業「キエ一口がエ一口」プロジェクトが進められています。本プロジェクトは、ふじみ野市環境課がごみの減量に向けて取り組んでいた生ごみ処理容器“ベランダdeキエ一口”（以下、キエ一口）に関して、心理学を学ぶ学生たちと協働しながら導入促進を目指す取り組みで、今年2月には、キエ一口についての情報交換や交流の場として「キエ一口ATふじみ野市×文京学院大学OBOG」アプリを開発し、リリースしました。

今回は、キエ一口の魅力がふじみ野市の方々により浸透するように、学生が制作したシナリオをもとに、利用促進動画の企画・制作を行いました。本動画は、キエ一口の使い方のポイントを解説するとともに、実際に学生たちも食事を作り、その際に出た生ごみや揚げ物の残り油をキエ一口へ投入し、分解されていく経過を見せるなど、ストーリー形式の工夫を凝らした内容になっています。撮影には、ふじみ野市内の老舗蕎麦屋「㐂久家」さんにもご協力いただき、ふじみ野市PR大使「ふじみん」も参加し、学生とともにキエ一口の特徴を楽しく紹介しています。

今後もキエ一口の利用促進のために、ふじみ野市と連携し、様々な取り組みを行っていきます。

「キエ一口ATふじみ野市 × 文京学院大学OBOG」アプリのダウンロードはコチラから



完成した動画
「必見！“ベランダ de キエ一口”的
こんな使い方 天ぷら編」



「㐂久家」での撮影風景



揚げ物の調理を行う学生たち（左：永久教授）

大学

認知症サポーターフォローアップ講座 4年ぶりに開催

7月22日、ふじみ野市主催の認知症サポーターフォローアップ講座「ひとり歩き高齢者声かけ模擬訓練」が4年ぶりにふじみ野キャンパスで開催されました。ふじみ野市内在住・在勤・在学の認知症サポーター養成講座修了者（オレンジリングを持っている人）を対象に、ふじみ野市民、ボランティア、本学人間学部人間福祉学科の学生など計51名が参加しました。

認知症サポーター養成講座とは、認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けする「認知症サポーター」を全国で養成するという国の方針に沿って、全国で展開している養成講座です。

当日は、ふじみ野市の担当者から「①ふじみ野市の現状」「②認知症サポーター養成講座の振り返り」「③ひとり歩き（認知症等）の人への声かけや対応のポイント」「④声かけ訓練のやり方・注意事項について」などのレクチャーがあり、その後グループに分かれてキャンパスのあちこちで、「認知症の人が道に迷っている」、あるいは「自販機の前でどうしたらよいか困っている」、などのシチュエーションを模擬的につくり、認知症高齢者への支援方法を学びました。

終了後のグループワークとまとめでは、「困っている人がいてもなかなか声をかけるのは難しい」など、実際の場面での声かけの難しさなども意見として出ました。しかし、高齢の参加者からは、「本学の学生と協力しながら取り組めたのはとても意味があった」との感想もあり、とても有意義な学びの時間となりました。

PHOTO GALLERY フォトギャラリー



まちづくり研究センター（略称：まちラボ）では、コミュニケーション社会学科の「まちラボプロジェクト演習/実習」の授業を通して、様々な地域連携イベント・プロジェクトが展開されています。

大学

「クールアースフェア2023」に学生がブース出展

8月4日、文京シビックセンターで「クールアースフェア2023～目指せ！ゼロカーボンシティ～」（主催：文京区）が開催され、「まちラボプロジェクト演習」（本担当：中山智晴教授）の一環として、人間学部コミュニケーション社会学科の3年生4名がエコロジー・キャンパスや環境配慮型社会の実現に向けてこれまで産学連携で取り組んできた活動に関するブースを出展しました。学生たちは、自らがより積極的に環境活動に取り組む姿勢を見せており、大学全体の環境意識を向上させることを目標に、造園業者と連携し、本郷キャンパス内にグリーンカーテンの設置作業を開始するなど、大学内のエコロジー化を進め、持続可能な社会の形成への理解を深めるための啓発活動を行っています。

イベント当日は、「廃棄ビニール傘の再資源化（製品化）プロジェクト」「廃棄プラスチック（ペットボトル）削減化の推進」「グリーンカーテンの設置に伴う校内の温度変化の実証研究」という3つの活動に関するパネル展示や、廃棄ビニール傘のアップサイクル製品の展示、自作デザインマイボトルの展示などをを行い、ブースを訪れた80名近い来場者をはじめ、他大学の学生たちとも活発な意見交換・交流が行われました。

今回の出展に参加した学生のコメントを以下に掲載します。

中 村 介

（人間学部コミュニケーション社会学科3年）

私たちのブースでは、大学の授業で実施している過去3年間に渡る環境活動の成果を展示しました。ブースを訪れた多くの方々から、マイボトル削減活動や廃棄ビニール傘のアップサイクル製品化に関する意見や感想をいただいたり、個人で環境問題に取り組んでいる方や海外に在住していた経験がある方からもとても興味深いお話を伺うことができました。また、他大学ブースの学生の意欲的な姿勢からもとても刺激を受けました。



イベント運営学生4名と中山教授（左）



展示概要の説明を行う学生



室内にグリーンカーテンの設置を行う学生たち

大学

秋葉原の打ち水イベントに人間学部生がボランティア参加

8月11日、NPO法人リコリタ（秋葉原で社会貢献を行う市民の会）主催のもと、秋葉原のメイドカフェで働く方などが多数参加する一斉打ち水イベント「うち水っこ大集合！2023」が神田明神で開催され、「まちラボプロジェクト実習」（本担当：岩館豊助教）の一環として、人間学部コミュニケーション社会学科の3年生5名が現地のアテンド・警備などのボランティア活動に参加しました。

本イベントは、都市のヒートアイランド対策と地球温暖化対策の一環として毎夏実施されており、初開催から20年目を迎える今年は22グループが参加し、一般の参拝客と一緒に打ち水を行いました。

今回イベントに参加した5名を含む同学部の10名の学生は、これまで秋葉原でのフィールドワークなどを行い、都市・地域文化の「創造的継承」をテーマに掲げ研究をしています。学生たちは本イベントのボランティア活動を通して、秋葉原の環境問題を考えるきっかけにするとともに、打ち水活動の20年間を振り返ることで、この先も打ち水活動が継承され、秋葉原文化の一つとして根付かせるためには、何が必要かを探るきっかけとします。

尚、本研究内容は冊子に纏め、11月に開催予定の打ち水20周年パーティーの来場者の方々に配布される予定です。



ボランティアとして参加した5名の学生と岩館助教（右）



イベント当日の様子



「ベスト16」

《主将生徒インタビュー》

試合後のリアルな心境を聞いてみました!

猪瀬 里花子主将(3年)



Q インターハイ出場を通して、全国の壁を感じたのはどのようなところでしたか?

日本一を目指すチームがたくさんいる中で、どれだけ他のチームが勝ちに拘っているかをとても感じました。1点とった時の雰囲気の作り方など、プレー以外の姿勢の違いも感じました。

Q 今大会でご自身が今後の自信に繋がったのはどのような点ですか?

レシーブ面は良かったと思います。文京は大きい選手がないので、レシーブをしっかりセッターに持っていくことが大事です。インターハイで、レシーブの返球がいい時にいいパレーができました。

Q 逆に課題だと感じたのはどのような点ですか?

大事なところでスパイクを決め切ること、簡単なミスが出てしまうことです。やっぱり試合では、日頃の練習や生活態度も全てが、プレーに出てしまうと思います。だからこそ、自分たちで厳しく、良い緊張感のある練習を作ることがこれからの課題だと思います。

Q チームとしての成長(技術面・精神面含めて)はどのようなところに感じましたか?

チームとしては技術面ではサーブが良くなったと思います。サービスエースの数も予選に比べて多かったと思います。他にもチームとして、強いチーム相手にも互角に戦える力はついてきました。そこは以前より成長していると思います。今後は、互角に戦えるだけではなく、しっかり勝ち切る力をつけていきたいです。インターハイを通して、コートでは全員が思いっきり楽しんでプレーをすることができました。全国のチームと戦ったことで、練習では、「あのプレーをしてみたい」「あの時こうだった」と1人1人が考えるようになったので、プレーがもっと良くなっていくと良いと感じています。

Q 春高バレーに向けた意気込みを教えてください。

インターハイを通して、応援団と選手、文京学院が1つになり、全員が楽しくプレーすることができました。全国の舞台で試合ができ、とても嬉しく思います。北海道まで駆けつけてくださった先生方や配信を見て応援してくださった方々、ありがとうございました。この33人の部員、先生、保護者の方々と全国の舞台、春高でプレーができるよう、激戦区の東京都予選を勝ち抜くためにこれからも練習を頑張っていきます。春高でインターハイのリベンジをして、全員で日本一をとるために頑張っていくので、これからも応援よろしくお願いします。



《インターハイ試合結果》

予選
グループ戦 本校 **2** (25-21 18-25 25-19) **1** 熊本信愛高校

決勝トーナメント

2回戦 本校 **2** (25-9 25-20) **0** 誠信高校

3回戦 本校 **0** (23-25 28-30) **2** 都市大塩尻高校

中学バレー部 東京都大会・関東大会で 「優勝」! 全国大会に出場



佐藤 杏菜主将(3年) 私たちバレー部は東京都大会で優勝し、その勢いのまま関東大会に臨みました。全国大会の出場をかけた1・2回戦はとても緊張しましたが、3回戦からは普段通りのプレーができたと思います。その結果、関東大会でも優勝することができ本当に嬉しかったです。試合後にチームメイトや保護者の方、応援に来てくれた先生方とみんなで手をつないで歌った部歌は私の一生の思い出です。全国大会は関東優勝チームのプレッシャーもあり、納得のできるプレーができず、悔しい結果となってしまいました。今年の夏は勝つことの喜びと、負ることの悔しさの両方を体験することができました。この経験を糧に、技術面だけでなく精神面ももっと鍛えて、高校でも頑張りたいと思います。私たちを応援してくださった皆さん、本当にありがとうございました。

中学 ソフトテニス部

4年ぶりに個人・団体ダブル優勝で 東京都大会に出場



6月17日、「文京区中学校ソフトテニス夏季大会」の個人戦において、昨秋に都でベスト16に入賞した関根瑠美さん(2菊)・吉田遙さん(2栗)ペアが他を寄せ付けることなく「優勝」、さらに、長谷川理紗さん(2桃)・桑原花菜子さん(3栗)ペアが初の「第3位」入賞を果たし、2ペアが個人で都大会への出場権を獲得しました。長谷川さん・桑原さんはライバル校の3年生ペアを次々に倒し、大きな成長が見られました。

6月25日に行われた団体戦では、畠山さわさん(2桃)・松本新菜さん(2栗)ペアを加えた6名の少数精鋭での戦いとなりましたが、個人戦の勢いのまま、今シーズン初めて「優勝」することができました。この結果により、団体でも都大会出場を決めました。文京区での個人・団体ダブル優勝は実に4年ぶりです。

そして、7月21日から有明テニスの森で行われた「東京都中学総合体育大会ソフトテニス選手権大会」では、個人・団体とも上位入賞は叶いませんでしたが、チーム全員で戦った夏でした。

中高 カラーガード部

関東大会「金賞」 全国大会「第2位」などの活躍



7月9日、「関東カラーガードコンテスト2023」が埼玉・彩の国くまがやドームで開催され、中2~高2までの部員総勢23名が出場しました。生徒たちは練習の成果を十分に発揮しながら見事な演技を披露し、「金賞」を受賞することができました。特に、中学2年生は入部当初の1年前と比べると、大きく成長した姿を見せてくれました。

また、7月30日に東京体育館で開催された「全国高等学校ダンスドリル選手権大会」では、TALLFLAG部門で「第2位」となりました。優勝を目指していたため悔しい結果となりましたが、日々の練習を大切にし、全力を尽くして取り組んだ姿は、後輩たちの手本となりました。また、特別賞として「ベストコスチューム賞」を受賞しました。

さらに、8月27日に武蔵野の森総合スポーツプラザで開催された「JapanCup2023」では、カラーガード部門で「第5位」に入賞しました。社会人のチームも参加する中で、昨年度より1つ順位を上げることができ、手応えを感じることができました。現在は、文女祭にむけて演技を作り上げている最中です。より良い演技をするために、日々練習に取り組んでいます。応援よろしくお願ひいたします。

高校 バレーボール部

ビーチバレーで関東大会に出場



7月17日、杉並区の永福体育館ビーチバレーコートにて、「東京都ジュニアビーチバレーボール大会」が行われ、森本優里さん(2杉)・辻本美結さん(2杉)ペアと田口聖奈さん(2杉)・鈴木凜々子さん(2杉)ペアが出場しました。

森本さん・辻本さんペアは、1回戦の東京高校3年生ペアに勝利し、2回戦には第1シードの共栄学園高校ペアに敗れましたが「ベスト8」、田口さん・鈴木さんペアは、1回戦はシードで、2回戦の駒澤大学高校ペアに勝利、準決勝で共栄学園高校ペアに敗れましたが「ベスト4」となり、両ペアとも関東大会出場を決めました。

そして、8月19日・20日に立川市のタチヒビーチで行われた「関東ジュニアビーチバレーボール大会」では、森本さん・辻本さんペアは、予選リーグ2位・2位トーナメント2回戦

敗退、田口さん・鈴木さんペアは、予選リーグ3位・3位トーナメント2回戦敗退という悔しい結果となりました。

両ペアとも、5月から週に1回放課後に、川崎にあるビーチコートに通い始め、まだまだ不慣れですが、少しずつ上達しています。試験終了後は、午前中に学校でインドアの練習、夕方に川崎でビーチの練習を両立しています。卒業生で日本代表の長谷川暁子氏も指導に来てくれました。長谷川氏の指導に対し、森本さんからは以下の感想が寄せられました。

「5月からビーチバレーを始め、何も分からぬ私たちにビーチでのレシーブの形からスパイクの助走、声掛けや相手の崩し方など、たくさんのこと丁寧に教えてくださいました。それにより、短い時間で強いチームにも正々堂々戦えるようになりました。長谷川先輩から教えていただいたこと、ビーチでの経験を活かしてインドアでも頑張ります」



中学 新体操部

9年ぶりの関東大会で奮闘

7月26日、中学新体操部は関東大会の予選でもある「東京都総合体育大会新体操選手権大会」団体競技の部において、9年ぶりに東京都代表の切符を掴み取りました。

そして、8月6日~8日、トッケイセキユリティ平塚総合体育館で開催された「第54回関東中学校新体操大会」に出場しました。公式練習から本番まで、分割みのスケジュールが組まれ、短時間で仕上げなくではならず、また、周りの雰囲気に呑まれてしまい、最初は焦るばかりでした。ミーティングを繰り返し、動きの確認ができるようになつた頃には、いよいよ本番。会場には、中高新体操部員をはじめ、先生方・保護者、そして他の東京都代表関係者の応援団があり、大声援のもと大舞台の中で堂々と踊りきり、入賞とはなりませんでしたが、ノーミスで今までの中で一番良い演技で終えることができました。生き生きとした笑顔でフロアをあとにした選手の姿が印象的でした。この経験を活かし、これからも頑張っていきます。



高校 吹奏楽部

東京都のコンクールで 「銀賞」受賞

8月14日、吹奏楽部は府中の森芸術劇場で行われた「第63回東京都高等学校吹奏楽コンクール」C組(20人以下の部)に出場し、「銀賞」を受賞しました。

コロナ禍で練習が大幅に制限され、新入部員が集まらない状態がしばらく続いていましたが、今年ようやく通常練習が再開になり、新入生に入部してもらえるような魅力ある部活動にしようと、これまでの練習メニューや演奏曲目、部内の人間関係の在り方まで見直し、部活改革に取り組みました。そうして入部した10名の新入部員とともに、この数年届かなかつた吹奏楽コンクールでの「銀賞」を目標に、練習に励みました。初心者ばかりのバンドではなかなか思うように上達せず、焦ることもありましたが、ひとりひとりが「音楽で伝えよう」を胸に楽譜と向き合い、本番では積極的に表現することを楽しむまでに成長しました。

これからバンドみんなでひとつずつ本番を乗り越え、絆も音楽も深めていきたいと思います。応援してくださった皆様、ありがとうございました。

